① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第9巻 第7号　1964年7月25日　大町山岳博物館

案内所風景

例年いまごろ、観光案内所前は登山者でごったがえしているのですが、本年は連日の雨で登山者の数も、少なく、なんだか淋しい気がします。こんなに続く梅雨も珍らしく、よく昔は梅雨が続いても大町祭りになれば晴れるといわれ、大体十七、八日頃から天気は夏型になったものです。昔は大糸線の汽車も電車もディゼルカーもなく、乗合バスが一日二三往復しかなかった頃は、汽車で大町へ下車した登山者は全部八日町の百瀬慎太郎さんの経営していた対山館へ一泊、翌日大町から白馬岳方面はバス、針ノ木、鹿島槍、烏帽子岳方面はてくで出発したものです。だから対山館は山の旅館で大繁昌したものです。

その頃の登山者はほんとうに山の好きな方方だったので途中で登山者などが、すれ違うさい馬鹿丁寧な挨拶を交えたものです。

最近登山者の装備は時代とともに流れるという訳ですか軽装が多くなり、ショートパンツスタイルなどもあり、これでは山では危険だと感する時は補導も致しますが、気持も昔の人にくらべてドライといいますか、よけいなことをいうなのような態度を表す人もいます。私達は、せっかく登山にきた方々が無事に目的を遂げられて帰宅されることを望むだけです。案内所前の柳も毎日雨にぬれていつ天気になるか判らない今日この頃ですが一日も早く晴天となり、元気な若い人達が勇んで出発する日を案内所から望んでいます。

（大町山案内人組合長　丸山充嘉）

スズメの蕃殖習性

佐野昌男

スズメは、およそ人の住む所ならたいていのところにすんでいる。人間の文明が自然の中に深く入り込み他の鳥は減る一方でも、逆に次第に増えているのである。そして人間の住んでいない所には、スズメも棲んでいない。このようにスズメ位全ての野鳥の中で人間の生活に密接な関係を持っている鳥はほかにない。しかし、スズメに関しての研究はほとんどなく、全貌はさっぱり分かっていない。そこで、今まで私の調査してきたスズメの生活史の内でその蕃殖習性について、二、三思いつくまゝに書き綴ってみる。

北山地方（標高千メートル）に於いて巣作りの始まるのは、積雪の見られる二月下旬頃からであり、巣作りは雌雄で行なう。巣作りは約一ケ月続くがこの間における巣の争奪戦は非常に激しく、強い夫婦は最も良い巣に弱い夫婦は価値の低い巣へと追いやられ次第に巣が決まり、なわばりが形成されて行く。

産卵は普通五〜六個で、毎日早朝一個ずつ産卵され、そして、最後の卵（止め卵）が産みおとされたその時から抱卵に入る。

スズメの夫婦は前に述べたように、巣材運びは勿論、なわばりの防巣、抱卵、育雛など蕃殖に関する仕事の全てを雌雄が協力して行なっている。たゞし、抱卵や給餌など直接育雛に関する仕事の内容量は雌と雄とで幾分違ってくる。

抱卵は普通十二日間行なわれ、一日の雌雄の抱卵状況は次のようである。雌は夜間における抱卵の全てを行ない、夜が明けると一夜の空腹を満たすため採食をしに巣を離れる。一日の内でも午前六〜七時の抱卵時間は最低で十分以下になることもしばしばある。日中における抱卵時間は二十〜四十分あたりを上下して、午後四〜六時に再び少なくなるが、この時は午前中のそれよりもやゝ高い。午後の抱卵時間の低くなるのは、飲まず食わずの一夜を迎えるための採食に出るためと思われる。ところが雄の抱卵時間は雌と逆で、夜は抱卵しなく、雌の抱卵時間の最低である午前六〜七時には最高で三十〜四十分にも達する日中においても雌が多ければ雄は少なく、少なければ多くなる傾向が現われる。以上のような雌雄の抱卵時間の違いは抱卵期全般を通じて言える。

抱卵期における巣の出入回数、すなわち採食回数は雌雄共に一時間六回以下で普通三〜四回である。

育雛期における抱雛時間は、育雛初期では抱卵期に見られたような変化のしかたをするが育雛進行と共に抱雛時間が次第に少なくなってくる。育雛七〜九日目頃には今まで夜間巣に留まっていた雌は、夜巣を空け別の畤へつくようになる。これは後にも述べるが雛が親鳥に抱いてもらわなくても十分自から体温を維持できるようになったからであり、それ以後は、雌雄共に入巣時間は一時間十〜五分以下で、これは抱雛ではなく巣を整えたり、雛の糞を持ち出すための入巣である。

次に、育雛期における雌雄の雛への給餌回数の変化を調べてみると、雛は孵化直後から本能的に大きな口を開き餌を要求する。この時から親は給餌を始めるが孵化当日では一時間平均雌雄共に三回位であるのが二日目になると雌六回、雄三回で雌が次第に多くなってくる。このように日一日と雛が生長するにつれ、餌の要求も強くなり給餌回数も非常に多くなり育雛後期には雌は多い時には一時間二十八回、雄十四回位にもなる。育雛後期における雌雄の一日の給餌回数は三百五十〜四百五十回にも達するこのように忙がしい育雛が巣立前におよそ十四日間も続く。

又、抱卵温度と育雛温度の変化状況は次のようである。抱卵温度は親鳥の抱卵と気温に影響されながら常に上下変化を繰り返している。親鳥が巣にいない時には常に気温に向って下がり、親鳥が巣に入ると親鳥の体温に向って上がりはじめる。このような変化は抱卵初期では摂氏十二度の差で大きく変化しているが抱卵進行と共に、その差は半分位になり小きざみな変化が見られる。抱卵期全体を通して、抱卵温度はおよそ摂氏二十七度位である。育雛期における抱雛は雛の生長に非常に関係が深く、育雛

巣箱を利用するスズメ

初期では抱雛期と同様で摂氏六度位の差で小きざみな上下変化を見せる。ところが育雛中期になると非常に安定した変化を見せ、育雛前期に見られた数分の内に六度もの上下は見られず、なめらかな変化である。これは雛が十分生長し自ら体温を発することができるようになり、一応、親鳥や気温の影響を受けなくなったという事であり、この頃になると親鳥は抱雛の必要もなくなり給餌を一生懸命やり夜の抱雛の必要もなくなる。

育雛十四日間の雛の生長は次のようである卵は一個約二グラムで、孵化直後の雛はこれよりやゝ少ない。雛はすぐ餌を要求し、体重は毎日二グラム位の割で増して行き、十日目頃には頂点に達し、およそ十九グラム位になり、それ以後は巣立ちまでの四日間に一、五グラム位減少する。これは羽毛が開き始める時期で、体の生長に加え羽毛生長の栄養が必要となるためであり、羽毛生長に関して初列風切羽の延びをみると育雛八日目から延びはじめ、八～九日目は約二ミリメートルの延びであるのが十日目以後になると急に大きな延びをみせ、毎日六～九ミリメートルも延びている。十四日目には三十七ミリメートル位にもなる。翼面積も十日目、約三十平方センチメートルであるのが毎日七平方センチメートル位ずつ増え、十四日目には五十五平方センチメートル位になり巣立ちが行なわれる。

巣立ちとは巣を離れること、すなわち飛翔することである。この点において成鳥と巣立雛の間に飛翔という点で共通なところがなければならない。巣立雛は成鳥と比べ体重も翼面積もはるかに少ないが、単位面積に加わる重さ（翼面荷重）を比較してみるとほゞ一致し、これが巣立ちの一つ大きな条件の一つであることが分かる。

スズメの行動範囲は蕃殖期に入ると急に小さくなり巣を中心にして約千平方メートル位である。これはなわばりの確保、卵や雛の温度低下の防温、雛に与える餌など賄いのできる広さで、これ以上広くなると蕃殖に支障をきたすものと思われる。又巣を中心に四方八方へ行動することはまれで、巣の回りの建物樹木などの状況により行動の方行が決まる。

巣立ちはほぼ同時に行なわれるが中には、生長不足のが雛があり一日も二日も遅れることがある。この場合親鳥は両方の雛へ給餌する。さて、巣立雛は二日目位まではほとんど他の兄弟とかたまって、枝で静かにしているが三日目頃から次第に動きが大きくなり、他の兄弟たちとも離れてしまう。この間、雛は少しずつ自分から餌を見つけ食べ始める。こうして次第に親の目のとどかない所へ行動して行き、ついには親の行動範囲外へ飛び出し自立するこれが巣立ち十一日目頃である。

以上、簡単にスズメの蕃殖習性を述べてみたが紙面に限りがあり、言い足りない点も多々ある。終りに、これを読んだ方々に、御批評、御意見、御指導をお願いする。

（茅野市北山小学校教諭）

スケッチ

黒部ダム開放

黒部ダムの一般開放は全国の注目のまとであった。

七月一日・二十日と開放の予定は延期されてきたが、八月一日開放が有力になってきた。

若一王子神社 やぶさめの神事

長沢欽平

やぶさめは其起原を遠く鎌倉時代に遡り、武家や公家が武技として競うものと、王子の宮のように神前に申上げるものの二ッある。

仁科盛遠は紀州熊野那智神社より若一王子を御勧請申上げ、その本地仏十一面観音と共に町の地割を整え町の西南にあった古宮（ふるみや）に祀る仁品王、妹唧（いもや）姫の宮を今の最北端に移し合祀し社名をも改めました

やぶさめは盛遠が後鳥羽上皇に御味方申上げるに事を寄せ兵を募ったに始まると申します。定めし安曇武士の腕をっ練たことと存じます若一王子とは天照大神の仏名で御母伊佐那美も熊野では「くまのくすみ」と申し御異称なのです。

従って行政区域も同じ又、同じ祭神の仁科神明宮と同一神社の体形で、祭りは仁科神明は七月十六日王子は十七日、やぶさめも祭典も相互共通に行い初めは仁科氏の岐れである渋田見家から一騎三神主の内から一騎、大町の曽称原家から一騎を出したが渋田見家が嵯州へ移転してからは三神主から一騎、地元宮本部落から一騎、大町年寄十人の家から一騎を出すように変りました。

明治維新を迎え神社も行政区劃も変り仁科神明は社村に属し氏子の数一頓に減少し費用に堪え兼ね宮本ではやぶさめを廃めるに至りましたのは惜しいと思います。

大町上中町麻問屋伊藤重右エ門氏はやぶさめ出場の射手が極小範囲である事から民主化を称え氏子の自由平等を説き、自ら巨費を投じ、伊勢津島よりやぶさめの衣裳、馬具、武具を購入し各部落に贈って今の十騎出場の緒を為した、その功績を讃えなければならない

昔は射手は両親のあるけがれのない六、七才の男子がその選に入り、出場の射手は切火による別飯、つまり身を清め奉仕するのが常でありました。

境内に的が三ケ所あり、祭典当日はやぶさめは禁札の場所で宮司の誘導によりおはらいを受け三度空廻り、三度射る、三度あてがう九度射る形式をとります。

終って神前に至り、玉串奉奠健康と息災を祈願申上げ、退下神社より的板、御供を受け各部落年番詰所に帰り休憩します。

昔は今の様に化装白粉はない羽毛もない。一週間もお白粉に水を加えアク出しをして兎の手を乾燥したものを羽毛の代用に使いました。射手に選ばれた家では親類、知己を招き祝ったもので今でもその風習は続いています只戦争未亡人の為めに射手出場の制限両親のあるの項は緩和し片親でよい事になりました

王子の宮は白砂の境内に本殿観音堂、卒塔婆、三重塔其他均勢のとれた配置、森の古木と相待って誠に古人の工夫の並々ならぬものが伺われます。

やぶさめに用いる矢竹は昔から八坂村の竹奉行の跡である勝野家より、的板は山奉行の跡野口の矢口家の奉るところ、仁科氏亡びてこゝに七百年夢を秘めたまゝ深い眠りを続けて居ります。北アルプスの峻嶺に向い往時を追懐いたしますと感慨無量でございます。

四か条騒動（3）

巾具義

また「（大町の）茶屋権四郎店には、太物（反物）・紙類・小間物・穀物などを商売し専ら麻を買い入れ、京・名古屋・大坂へ送りける。近来他国より出す所の麻からむし沢山にて、売買下値なるに、信濃麻は性合よろしからす上野・下野等より出す所に劣れるをもって、値段安く売捌き、当年別して下値の由上方表問屋より告げ来りける。大町麻買共より四か条辺麻元へその趣申し伝へけるに、兼て大町麻仕（師）共、上方問屋と腹を合せ値段下値と云い触らし、われらが麻を買い占め面々徳（得）分を謀り、我が輩に損失かけ、難渋さするに疑いなしと、放僻の心より妬怨を生じるにや。」といって、麻もまた麻商人が暴利をむさぼるがために百姓は困窮したと説いている。

以上のごとく、この騒動の原因として赤蓑談では

一、気候不順より来る凶作。
一、米の払底。
一、麻値の下落。

など三点を指摘している。そこで、赤蓑談に云うところの原因を、他の史料にてらして探ってみたところ、気候不順は平年に比較してたしかに見られるところであり、しかもこの年以前二か年ほどにわたって気候不順が見られ、この点は最早疑いないところである。当時の農業技術からいってこの気候不順に対する施策は何等科学的なものがある筈はなく、ただいたずらに神仏の加護を頼るほかない有様であったろう。あまつさえ冷害に苦しむ四か条平であってみれば、この不順気は相当にひどくこたえた様である。しかしこれが直ちに百姓一味徒党を組むということに結びつくものとは考えられない。間接的原因としての気候不順の上に、何らかの直接的動機を考えてよい様である。

そこで第二原因とされる米の払底であるが元来四か条を含む大町組では、平年でさえ米の払底を来して居り、その為年々の祖税として各組が米を藩へ納めるときでも、大町組は代金納、すなわちその年の米値段に応じて計算された金銀貨によって納める方法が許されていた。もっとも代金納の理由には、ほかにもその理由がないわけでなく、松本城下へ米の輸送をするには大町組はあまり遠距離であるからといっているが、やはりこれればかりでなく根本的に米の不足する地帯であるのである。この様なところへ不順気で凶作となると、わずかな不穏空気が雪だるま式に拡大していくといった群衆心理のあらわれではなかっただろうか。麻についてもたしかにこの年もその前年も麻の不作が史科に見られるところであり、米にたよれぬ四か条百姓としてはこれが重要な換金作物であって見れば、風説にもせよ麻師たちの暴利があったといえば、当然麻師攻撃の態度となったのであろう。

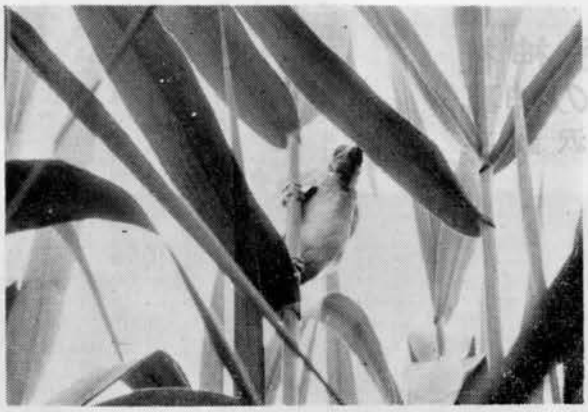
ともあれ、確固たる証拠史料もないままにいろいろと騒動原因をさぐってみた。学者はかって四か条騒動の時の百姓が同盟のための車連判状を書いたということをきき、それがあれば組織立った騒動となし得るので極力さがしたのであるが、それも見当らず、現在では如上の域を脱し得ないのを遺憾とする。結局、群衆心理に根ざした暴動でしかないのだろうか。

（松川小学校教諭）

オオヨシキリのヒナ

長沢修介

6月も下旬になると晴天の日には真夏を思わせるような日がある。そんな日、草丈の長い草原を歩いていると、ムッとする草息きれでくらくらと目まいがする。あまりカンカン照りで暑いので、ヨシの林の中に入って涼んで冷い湧水で喉を潤そうと背丈の二倍もあるヨシをかき分けて入り込んでみたら、これはまたまったくの密林で中はうす暗い。その中をヨシをかき分け進むと、ギリィ、ギリィとオオヨシキリの警戒声が聞える。その声は歩むにつれ前後しつつ、ついて来る。それは私の来たとこを次々と親鳥達によって引継がれて行くためである。あまり警戒声が近いので顔を上げて見ると目の先のヨシに巣立ちしたばかりのヒナが、親の心配をよそに始めて見る人間に驚きの目を見張っていた。



博物館ニュース

「山の自然科学教室」

この「山の自然科学教室」はことしで八回目を迎え都内の中学生一八〇名が、山博を中心に黒沢高原や八方尾根で山の自然に親しみ動植物の観察や正しい登山の方法について学習した。

黒沢高原に宿舎ができたので市内宿泊日数をふやして開催したが、明年は大町温泉の引湯も実現し、宿泊施設も完備するので、違った角度から検討し、市内中学生と都の中学生との交歓を深める立場から、市内だけで日程を組み益々発展させたいものだ。

針ノ木自然園の調査報告書

扇沢、針の木地区の利用、保護について昨年八月、自然保護協会が調査した、扇沢針の木岳周辺の観光資源およびその保護開発に関する調査報告書ができてきた。

それによると国の力で貴重な自然保護を進めるよう国立博物館の必要性が強調されている。市も人口三万余の弱小市であってみれば意慾や義務感ばかり先ばしって手も足も出ない現況なので、国の施策を切に希望している

表紙説明

若一王子神社祭礼のやぶさめ

撮影　県泰朗

山と博物館　第九巻　第七号
一九六四年七月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）二一一
大町山岳博物館
印刷所　大町市上仲町
信州印刷大町工場